

訳注：濱文庫所蔵唱本『美女五更思春』訳注

戚，世雋

九州大学大学院人文科学研究院招聘外国人教師：中山大学副教授

土屋，育子

佐賀大学文化教育学部

中里見，敬

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門：准教授：国際文化学

<https://doi.org/10.15017/21813>

出版情報：言語文化論究. 28, pp.323-336, 2012-03-02. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：図 Courtesy：九州大学附属図書館



濱文庫所蔵唱本『美女五更思春』訳注

戚 世 雋・土 屋 育 子・中里見 敬

九州大学大学院言語文化研究院 言語文化論究 第28号 平成24年2月発行 抜刷

Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
Motooka, Fukuoka, Japan

STUDIES IN LANGUAGES AND CULTURES, No.28, February 2012

濱文庫所蔵唱本『美女五更思春』訳注

戚世雋¹・土屋育子²・中里見敬³

【解説】

本稿は、九州大学附属図書館濱文庫所蔵の唱本『美女五更思春』（浜文庫／集164/62）に訳注を施したものである。二〇一一年度前期に戚が文学部で開講した「中国文学作品演習Ⅰ」で本テキストを講読した。その演習の内容を基礎として、土屋と中里見が整理・補充して草稿を作成し、戚の校閲を経て定稿とした。演習で講読を担当した大平倫高、金見正悟、神代沙織、吉田光一、幸島光義、およびティーチング・アシスタントとして授業全般をサポートした雁木誠の六名に対して、特に記して謝意を表したい。また、末尾の図版掲載にあたり、九州大学附属図書館よりご厚意を賜った。記して深謝したい。

「美女五更思春」は歌妓が楽器を用いて、歌ったものと思われる。楽器は地域によって様々であるが、例えば蘇州では琵琶を弾きながら、北方では鼓をたたきながら、あるいは胡弓を弾きながら唱ったのであろう。一人の歌妓が、冒頭では地の文に相当する語りを始め、まもなく美女の役を唱い、さらには男の書生役のパートも唱う。このように一人で何人もの役を唱う形式を代言体といい、講唱文芸の特徴となっている。演劇が一人一役に扮する演唱体であるのと好対照をなす。

内容については、男女の逢い引きを描くが、「父母之命、媒妁之言」といった儒教的な倫理観にとらわれない、民間の男女のかけひきを感じききと描写する。

本書は一冊全四葉、大判164×104cm、匡郭内111×77cm、濱

文庫所蔵唱本の標準的な大きさである。封面に「新刻時興／美女五更思春／小曲 城内本堂」、版心に「美女」とある。

本作品には、濱文庫蔵の本テキストのほかに、異本として『二十五更』が存在する。『二十五更』は、一更から五更までの唱を五つ連ねた作品であるところから二十五更という。おそらく『二十五更』が先行するテキストであって、本作品は最初の一段「初会五更」のみ取り出して改編を加えたものと思われる。各テキストの書誌は次の通り。①は濱文庫および早稲田大学図書館風陵文庫蔵、②③は早稲田大学図書館風陵文庫蔵。

- ①『二十五更 五本』（光緒二十九年九月（一九〇三）曲詞館刊、浜文庫／集164/62、風陵文庫請求記号：文庫19/F0400/Z0656） 曲詞館本
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko19/bunko19_0400_z0656/index.html
 - ②『二十五更 五本』（刊本（出版者・出版地不明）、風陵文庫請求記号：文庫19/F0400/Z0654） 不明本
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko19/bunko19_0400_z0654/index.html
 - ③『二十五更』（刊本（出版者・出版地不明）、風陵文庫請求記号：文庫19/F0400/Z0655） 上海咄本
http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko19/bunko19_f0400/bunko19_f0400_z0655/
- 押韻は、十三轍（明清から北方の戯曲、曲芸等で押韻に用いられた十三の韻の分類）によりそれぞれ示す。押韻字には句点「。」を付した。原本には異体字・俗字が多用されている。本稿では多くの場合、常用の字体に直したが、異体字・俗字の後に（ ）を付して常用字を示したものもある。原本は末尾の書影をご覧いただきたい。

¹九州大学人文科学研究院招聘外国人教師

²佐賀大学文化教育学部准教授

³九州大学言語文化研究院准教授

一更里幼美女懶進房門。前走〃(走) 後到〃(到) 暗自沉音。
愁只愁 香閨内 無人陪伴、怕只怕 金烏墜 夜靜更深。
欸金蓮 閃玉腕 門兒開放、上月台 觀月景 坐在埃塵。
托香腮 垂挽袖 思前想後、可嘆奴 幼美女 獨自一人。
无(無) 奈何 回綉房 銀灯掌上、心内乱 不愛听 寒虫叨〃(叨)、
昏沉〃(沉) 病懨〃(懨) 牙床上坐、听了听 樵楼上 二更鼓深。

〔韻〕 人辰轍

〔校〕 ○香閨内……曲詞館本は「香閨閣」に作る。 ○夜靜……上海咄本は「夜淨」に作る。 ○思前想後、可嘆奴……各本とも「思前想後」と「可嘆奴」の間に次の句がある。「听了听學堂内鼓樂声音。有几个唱的是文君司馬、有几个弹的是出塞昭君。有几个唱的是妙常必正。有几个弹的是紅拂女私奔。古来人俱都是成双配對」がある。 ○銀灯掌上……曲詞館本は「把銀灯兒掌上」に作る。 ○銀灯掌上、心内乱……各本とも「銀灯掌上」と「心内乱」の間に「淒涼〃(涼) 倚圍屏陣〃(陣) 發昏」がある。 ○寒虫叨〃(叨)……不明本は「簷前鉄馬、絮叨〃(叨) 寒虫声勿起春心」、曲詞館本は「簷前鉄馬、絮叨〃(叨) 寒虫声勿起春心」、上海咄本は「簷前鉄馬、絮叨〃(叨) 寒虫声忽起春心」である。つまり、本テキストは「絮叨〃(叨) 寒虫声」の部分を「寒虫叨〃(叨)」とし、一句減らしている。 ○牙床上坐……上海咄本は「牙床上作」に作る。 ○樵楼上……上海咄本は「敲楼上」に作る。 ○二更鼓深……上海咄本は「二更鼓兒深」に作る。

〔注〕

○里……とき。現代漢語の「的時候」にあたる。用例としては、『張協狀元』戲文第十六出【後衰】「妾身年少裏、父母俱傾棄(私は幼いときに、両親とともに亡くし)」、「紅梨花」雜劇(古名家本)第三折【尾聲】「秀才也你三更里撞着鬼魂(秀才さんあんたは三更(真夜中)に幽霊に遭ったんだ)」がある。

○沉音……「沉吟」に同じ。物思いにふける。『紅樓夢』第三十八回「無頼詩魔昏曉侵、繞籬歛石自沉音(あの詩魔のやつが朝な夕なに襲ってくる。籬を繞り石の上にたたずみ物思いにふける)」。俗曲の用例としては、『白雪遺音』(清・華廣生、嘉慶九年(一八〇四)序、道光八年(一八二八)刊刻、清代中期の俗曲總集)卷一【馬頭調】「又是想來」「又是想來又是恨。自己沉音(恋焦がれたがり恨んだり、ひとり物思いにふけつたり)」など。

○怕……こころでは、「いやだ」ぐらいの意。

○金烏墜……「金烏」は中国の古代神話で太陽の中にとされる三本足の鳥のことで、太陽を指す。「金烏墜」は定型表現で、例えば『霓裳續譜』(清・王廷紹、乾隆六十年(一七九五)、清代中期の俗曲總集)卷一には、「金烏墜落、玉兔升騰、黄昏時候(お日様が落ち、お月様が昇るたそがれ時)」という用例がある。

○夜靜更深……「更深夜靜」「更深人靜」とも。夜が更けて静かな様子をいう定型表現。宋代ごろからの用例が多い。南唐・楊鸞「即事」「白日蒼蠅滿飯盤、夜間蚊子又成團。每到更深人靜後、定來頭上咬楊鸞(昼は蒼蠅が食事の盆いっぱいに群がり、夜は蚊が一かたまりになっている。夜が更けて人が寝静まったころ、さだめし頭上から楊鸞に噛みつきにくるのだろう)」。元雜劇では、「後庭花」(元曲選)第二折冒頭劉天義のせりふ「更深夜靜、有人喚門、好是奇怪(夜も更けて人も寝静まったというのに、門で呼ばわる人がいるとは、まったく変だぞ)」など。

○怕只怕「夜靜更深……」「夜が更けるのが嫌だ」という意味であるが、詞や散曲にも同趣旨のものが数多い。「怕黄昏」という形だが、周邦彥【慶春宮】「秋怨」「塵埃憔悴、生怕黄昏、離思牽縈(世俗にまみれて憔悴し、ただ黄昏迫るを恐れ、別れの思いにとらわれる)」などがある。

○欸……「欸」と通用。「欸」は「欸歩」ともいい、ゆつくりと歩くこと。白話文学の用例としては、「墻頭馬上」雜劇(古名家本)第二折【感皇恩】「教你輕分翠竹、欸(欸) 步蒼苔(翠の竹林にそっ

と分け入り、青苔の上をゆつくり歩く)、『清平山堂話本』巻二「藍橋記」『春色平分二月時、弓鞋款款歩蓮池(春も半ばの如月の頃、纏足の娘が蓮池をそぞろ歩く)』などがある。

○金蓮……「金蓮」は纏足した足のこと。南北朝時代、齊の東昏侯蕭宝卷の「金蓮歩」の故事が有名。『南史』巻五「齊本紀下」『廢帝東昏侯』に、「鑿金為蓮華以帖地、令潘妃行其上、曰、此步步生蓮華也(黄金で蓮の花を作り地面に置き、潘妃にその上を歩かせて言った。「ひと足ごとに蓮華を生ず」)とあり、本来は女性の美しい歩き方を言ったが、のちに纏足の足を指すようになった。「三寸金蓮」とも。

○玉腕……女性のかいなの形容に「玉」をつける定型表現の一つ。最も有名なのは、杜甫「月夜」『香霧雲鬢濕、清輝玉臂寒(かぐわしく雲なすまげはしつとりと、清らかにかがやく玉のかいなはひんやりと)』であろう。

○月台……母屋の前に突き出した、院子(中庭)の地面より一段高い平台。

○埃塵……地面。『金瓶梅詞話』第三十六回「一個个、心害怕、倒在埃塵(一人一人恐ろしくなつて、地面に倒れ込みます)」。

○挽袖……女性の上着の袖につけた付け袖。刺繍などを施した装飾品であるが、同時に汚れたときに付け袖だけ外して洗濯ができるという実用的な面もあった。なお、本文では単に「袖」と訳出する。『二十年目睹之怪現狀』第八十六回「只見另有一個人、拿了許多裙門、裙花、挽袖之類、在那里議価、旁边還堆了好几匹綢縐之類(ふと見るともう一人は、スカートの前部分や縁取り、付け袖の類をたくさん持って、その場で値段交渉をし、そばにはまた反物の類を何匹も積み重ねております)」。

○銀灯……銀製のランプ、またはランプの美称。詞曲では「銀燭」という形でもよく使われ、有名な用例としては、蘇軾「海棠」『只恐夜深花睡去、高燒銀燭照紅妝(ただ夜が更けて海棠の花が眠りについてしまうのではないかと思ひ、明かりを高く掲げてそのく

れないの花を照らし出す)』がある。

○掌上……「掌」は動詞。「手に持つ」、「(ランプに)火をつける」の二つの意味が考えられるが、ここでは「二更里」一句目の「要止銀灯」に呼応していると考え、「火をつける」意と取る。「上」は動作の完成および持続を表す補語。

○寒虫……秋の虫。コオロギ。「寒虫(または寒蛩)単独の用例は数が多いが、元の散曲では、丘士元の小令【雙調】『折桂令』「秋晩」に「鐵馬叮嚀、寒蛩不住、砧杵聲難(風鈴はティンタンと響き、コオロギは鳴きやまず、砧の音が途切れ途切れに聞こえてくる)」、王和卿の小令【商調】『百字知秋令』に「碧紗窗外風弄雨昔留昔零打芭蕉、惱碎芳心近砌下啾啾唧唧寒蛩鬧、驚回幽夢丁丁當當簷間鐵馬敲(緑の紗貼りの窓の外では横殴りの雨がヒューヒューと芭蕉の葉を打ち、いらいらさせるようにみぎりのもとでジージーとコオロギが騒がしく、夢を破るようにティンティンタンタンと軒先の風鈴が鳴る)」というように、寒虫と鉄馬(さらに「雨が芭蕉の葉を叩く」といった句が入ることもある)が一緒に使われる場合も多い。

○昏沉沉……頭がぼんやりするさま。

○病懨懨……体の具合が悪く振るわないさま。

○牙床……象牙の彫刻で装飾されたベッド、またはベッドの美称。

○樵樓……「譙樓」とも書く。城門の上の展望台、鐘鼓楼。

〔訳〕

一更のころ若い美女はねやに入るのも物憂げに、行きつ戻りつひそかに想う。

「気がふさぐのはお相手がいないから。嫌なのは日が落ち夜が更けること。」

忍び足でかいなを伸ばし戸を開けて、(家の前の)月台で月を見上げて腰下ろす。

ほおづえして袖を垂らして思うよう、「嘆かわしいことあたしは

一人」。

仕方なくねやに戻って銀のランプに火をつける、心は乱れ秋の虫が鳴くのもいとわしい。

ぼんやりぐったりベッドに座れば、聞こえてくるのは二更の太鼓。

〔補〕本テキストで省略されている部分について

・「听了听學堂内鼓樂聲音。有几个唱的是文君司馬、有几个彈的是出塞昭君。有几个唱的是妙常必正。有几个彈的是紅拂女私奔。古來人俱都是成双配對（學堂的鼓樂の音を聴けば、卓文君と司馬相如の物語を唱う者あり、昭君出塞を爪弾く者あり、陳妙常と潘必正の物語を唱う者あり、紅拂女が出奔する物語を爪弾く者もあります。古來人はみな連れ合いがあるものです）。」○文君司馬……漢代の卓文君と司馬相如のこと。『史記』『司馬相如列伝』

明代の戯曲に『琴心記』がある。○出塞昭君……王昭君が匈奴に嫁ぐ道中を描く。明代の戯曲に『和戎記』、昆曲の演目に「昭君出塞」がある。○妙常必正……明代の戯曲『玉簪記』に登場する陳妙常と潘必正のこと。二人はもともと親同士が決めた許嫁であつたが、北宋末の戦乱で妙常は母と離れ尼寺に入る。偶然、科挙の受験でおぼのいる尼寺にやってきた必正と意気投合する。必正は科挙に及第し、二人はめでたく夫婦となる。京劇の演目「秋江」が有名。○紅拂女私奔……唐代伝奇「虬髯客傳」に登場する人物。隋の煬帝の時、李靖は権力者楊素に献策を行った。その夜、楊素の妓女で名は紅拂という者が、李靖の非凡な人物に惹かれて楊家を出奔してきて、彼のもとに身を寄せる。明代の戯曲に張鳳翼『紅拂記』がある。

・「凄凉々（涼）倚圍屏陣々（陣）發昏（もの寂しさに屏風にもたれてひとしきりぼんやりする）。」○凄凉……もの寂しい。○圍屏……折りたたみできる屏風。○發昏……ぼんやりするさま。

・「簷前鉄馬、絮叨々（叨）寒虫声勿起春心（軒端の風鈴、くどくと鳴くコオロギの声に恋心を起こすなかれ（上海咄本「忽起春心」は「たちまち恋心をかき立てられる」）。」○簷前鉄馬……「鉄馬」は風鈴に類するもの。これには、次のような故事が伝わっている。陳芬『芸窓私志』（『説郛』卷三十二下）「元帝時、臨池觀竹、既枯、后每思其響、夜不能寢。帝為作薄玉龍數十枚、以縷線懸于簷外。夜中因風相擊、聽之與竹無異。民間效之、不敢用龍、以什駿代。今之鐵馬是其遺制（元帝のとき、池に臨んで竹をみると枯れており、きさきはいつもその響きを懐かしがって、夜眠ることができなかった。みかどは龍を彫刻した薄い玉を数十枚作り、糸で軒の外に掛けた。夜中風で打ち合つて、竹の音と違いがなかった。民間もこれをまねしたが、龍ははばかって、馬の彫刻で代用したのである。今の鉄馬はそのなごりである）」『南部烟花記（録）』には、最後の「今之鐵馬是其遺制」はない。また隋の煬帝のこととするものもある。○絮叨々（叨）……くどくと繰り返すさま。

二更里幼美女要止銀灯。听了听窓棧（櫺）外好似人行。奴当是我的母与奴作伴、不料想走进了白面書生。羞的奴面飛紅无（無）處藏躲、那学生進前來跪在流平。慌的奴急忙（忙）開言便問。誰家的小学生所為何情。小学生聞此言尊声姐（姐）、問此言莫要荒听講分明。我自從見了你身得重病。求小姐發慈悲超昇我的魂灵（靈）。小美女聞此言心中好惱、罵一声小学生好不正經。並非是不讀書不知礼义（義）、也念過上孟子踰牆相從。你家的小婦女人家求允。你把那天良心憑上一憑。小学生粧啞聾全然不懂。听了听樵樓上鼓打三更。

〔韻〕中東轍（人辰轍と通押、「問」「允」字は人辰轍）
〔校〕○幼美女……上海咄本は「有美女」に作る。○奴当是我
的母与奴作伴……曲詞館本は「奴只當兒的母与奴来做伴」に作る。

○走進了……曲詞館本は「走進来」、上海咄本は「走進个」に作る。○面飛紅……上海咄本は「臉非紅」に作る。○問此言莫要荒听講分明……上海咄本は「听此言莫要慌听分明」に作る。○求小姐……上海咄本は「求姐々(姐)」に作る。○超昇……上海咄本は「超生」に作る。○憑上一憑……曲詞館本は「平上一平」に作る。

〔注〕

○白面書生……若い書生、科挙に合格する前の読書人。「白面書郎」「白面郎」などとも。

○流平……地面、ゆか。用例としては、『劉公案』第四回「佳人聞听不怠慢、慌忙下炕站在流平(美女はそれを聞くと、あわててオンドルから下りてゆかに立ちます)」、「白雪遺音」卷一【馬頭調】「捐功名」「跪在流平。忙把禮行(ゆかにひざまずき、あわててお辞儀をいたします)」などがある。

○身得重病……ここでは「恋患いにかかる」こと。

○上孟子……『孟子』全七篇を二分して、孟子の仕官出処を記した「梁惠王」「公孫丑」「滕文公」の前三篇を「上孟」とし、師弟の問答雑事を記した「離婁」以下の後四篇を「下孟」とする。清・周広業『孟子四考』や伊藤仁斎『孟子古義』の説。

○踰牆相從……『孟子』「滕文公下」の「不待父母之命、媒妁之言、鑽穴隙相窺、踰牆相從、則父母國人皆賤之(父母の言いつけや仲人の言葉を持たずに、穴や隙間から相手を盗み見て、垣根を乗り越えて馴れ合えば、父母、国の人もみな賤しいことだと思ふ)」に基づく。

○求允……縁談を求めること。『警世通言』第二十三卷「喜將仕名門富室、他的女儿、怕没有人求允、肯与我家対親(喜將仕は名門で金持ちなので、娘に縁談が来ないのを心配して、うちとくつつけようとしているんだ)」。本文「你家的小婦女人家求允」は「もしもあなたの家の娘を他人が求めたとしたら」のように仮定と解

す。

○粧啞聲……口が利けず耳が聞こえないふりをする。「粧聲做啞」「做啞粧聲」などとも表記し、元曲などに多く用例がみられる。『西廂記』(弘治本)卷第三折、張生が鶯鶯からの手紙を読み、大喜びで垣根を乗り越えて逢い引きに出掛けたものの、逆に鶯鶯と紅娘から叱責を受ける場面で、【錦上花】「紅唱」「張生無一言、呀鶯鶯變了卦。……又手躬身、粧聲做啞(紅娘が唱う)張生は返す言葉もなく、「やや、鶯鶯は気が変わったぞ。……手をつかねお辞儀して、耳が聞こえず口が利けないふりをいたします)」とあり、さらにこの少し後の紅娘のせりふには、「張生、你過來跪着。你既讀孔聖之書、必達周公之理、夤夜來此何幹(張生、ここにきて跪きなさい。孔子さまの書を読んで、周公の道理に通じているはずなのに、こんな真夜中に何しにいらしたの)」とある(「理」は「禮」に作るテキストもあり、白話文学ではしばしば混用される)。このように『西廂記』のこの場面と本作品には共通する類型パターンが認められ、『西廂記』の白話文学における影響がうかがえる事例である。また、唱本がこのような伝統を引いていることが明らかにわかるといふ点でも大変興味深い。

〔訳〕

二更のころ若い美女が銀のランプを消そうとすれば、聞こえてくるのは窓の外を歩く音。

おつかさんだと思ったら、なんとまあ白い顔の書生さん。

恥ずかしさで顔は赤くなり隠れる間もなく、学生は進み出てゆかにひざまずく。

あわてて口を開いて尋ねるよう、「どちらの学生さん、いったい何をしに来たの」。

若い学生はそれを聞くと恭しく「お嬢さま」と呼んで、「お尋ねとあらば、あわてずにきちんと私の言うことをお聞きください。あなたにお会いしてからひどい恋患い。お姉さまお願いです、慈

悲の心で私の魂をお助けください。」
 若い美女はそれを聞いておおいに怒り、罵って言うよう、「学生さんたらろくでなし、勉強もせず礼と義をわきまえないわけでもあるまいし、また『孟子』上巻の、堀をのりこえ逢い引きするを存じでしように。あなたの家のお嬢さんを他人が求めたら（どうするか）、良心に照らしてよく考えてごらんさい。」
 学生は言わざる聞かざるでわからぬふりをする。聞こえてくるのは三更の太鼓。

三更里 幼学生 哀告裙釵。忙開口尊姐〃（姐） 好不明白。
 我並非 讀詩書 不知那礼义（義）、因此上花上情理上應該。
 我有心 托人說怕你不允、所以然大清律 一旦去開。
 我自從 在花園 見你一面、把我的魂灵儿被你勾來。
 想的我 身得病 忘生捨死、因此上捨性命 撞你满怀（懷）。
 望姐〃（姐） 發慈善 救我急難、勝是你 念弥陀 去吃長齋。
 今夜晚 你不從我 也不走、就死在你 面前叫人來抬。
 那時候 姐〃（姐） 你醜名在外。捻然似 江河水 洗不下來。
 好姐〃（姐） 今夜晚 依從于我、既在到 宝山 豈肯白來。
 小学生 說不盡 來情話語、又听得 樵樓上 四更鼓兒排。

〔韻〕 懷來轍

〔校〕 ○不知那礼義……曲詞館本・上海咄本は「不知礼義」に作る。
 ○因此上……上海咄本は「因此事」に作る。 ○理上應該……曲詞館本は「礼上應該」に作る。 ○大清律……上海咄本のみ「把法律」に作るが、これは清朝が倒れたあとに改編された可能性が考えられ、上海咄本の本文の成立が、他のテキストより遅れることを示すか。 ○一旦去開……不明本・上海咄本は「一旦丟開」に作る。 ○發慈善……曲詞館本・上海咄本は「發慈悲」に作る。

○勝是你……曲詞館本・上海咄本は「勝似你」に作る。 ○我也不走……曲詞館本は「我是不走」に作る。 ○捻然似……曲詞館本・上海咄本は「捻然是」に作る。 ○江河水……曲詞館本は「西江水」に作る。注を参照。 ○既在到宝山……不明本・上海咄本は「既在到宝山上」、曲詞館本は「我即到窑山上」に作る。「宝」には「うかんむりに缶」という異体字もある（本テキストはこの字体）ので、曲詞館本の「窑」は誤刻である可能性が高い。 ○來情話語……不明本・曲詞館本は「求情話語」、上海咄本は「求情的話語」に作る。 ○樵樓上……上海咄本は「敲樓上」に作る。

〔注〕

○裙釵……女性が身につけるスカートとかんざし。転じて女性を指す。「梧桐葉」（元曲選 第一折【賺煞】前の卜兒のせりふ「雲英、你是裙釵女流之輩、何故賡和他人詞章、豈不出醜（雲英、おまえは女のくせに、なんで人様の詞章に唱和するんだ。みつともない）」。

○因此上……「因此」に同じで、「上」は意味のない接尾辞。「七國春秋平話後集」卷上「齊王見袁達勢惡、方免孫子之命。孫子因此上得病不出（齊王は袁達がものすごい勢いなのを見て、やっと孫子の命を許した。孫子はそれで病と称して外へ出なくなった）」。
 ○大清律……順治三年（一六四六）に制定された清朝の法典で、全三十卷、四百五十八条からなる。康熙、雍正、乾隆帝の時代にそれぞれ修訂が施された。ここで「大清律」が引き合いに出されるのは、おそらく儒教的なきまりといった意味合いで、それを捨て去って逢い引きに來たということなのであろう。

○勝是……「勝似」に同じ。「く」にまさる。

○長齋……仏教徒の素食。

○江河水洗不下来……（恥や悪名は）長江や黄河の水でも洗いが落とせない」という意味だが、類似的な成語は早くから用例がある。「容齋三筆」卷五「油污衣詩」縦饒洗遍千江水、爭似當初不汚時（た

とえ千江の水で何度洗つても、最初の綺麗だったときとは比べものにならない」。白話文学の用例では、「桃花女」雑劇楔子末尾「饒君掏盡西江水、難洗今朝這面羞（たとえあなたが西江の水を掏い尽くしても、今日のこの恥をそそぐのは難しい）」（曲詞館本が「西江水」に作るのは、ここにあるような言い方もあったからであろう）、「柳毅傳書」雑劇楔子「饒他掏盡涇河水、難洗今朝一面羞」、「水滸伝」第九十八回「総教掏尽三江水、難洗今朝一面羞」などがある。○既在到宝山豈肯白來……もと仏教に関係する言葉。「宝山空回」で、すばらしい境遇にありながら、何も得ることがないことをいう。「心地観經」「離世間品」「如人無手、雖至寶山、終無所得（手段（ここでは正しい仏教の教え）が無ければ、宝の山に入つても、結局手に入るものはない）」。雑劇では「如入宝山空手回」として用例多数。「酷寒亭」楔子の孔目のせりふ「正是、当權若不行方便、如入宝山空手回」など。

○排……撃つ。

〔訳〕

三更のころ若い学生は美女に哀訴する。慌ただしく口を開き「お嬢さんはよくわかつておいではありません。

私は経書を読んで礼と義を知らぬというのではなく、色恋の情けを知るのは理の当然。

人づてにわが想いを伝えても承知されまいと気にかかり、それで大清算はすっかり捨て去りました。

花園であなたにお会いしてから、私の魂はあなたのとりことになりました。

恋焦がれて病となつて明日をも知れぬこの命、命をかけて思いを告げに参つた次第。

お嬢さま慈悲の心でわが苦しみを救い下さい。そうすればあなたが念仏を唱え御齋を食べるのにはるかにまさる功德を積むことになります。

今夜あなたが私に従わねば私も帰りません。あなたの目の前で死ねば人を呼んで担ぎ出さねばならぬことになります。

そのときにはお嬢さんあなたの浮き名が伝わることでしよう。たとえ長江や黄河の水でも洗い落とすことはできません。

すてきなお嬢さん、今夜は私の言うことを聞いてください。すでに宝の山にいるのにどうしてこのまま戻れましょう。」

学生が来意を尽くさぬうちに、またもや聞こえる四更の太鼓。

四更《里》幼美女主意難拿。好一个小後生要命冤家。

奴今日不從你（你）也不走、欲要從惟恐怕奴的爹媽。

這件事傳出去外人知曉、久以后是起来羞死奴家。

千尋思万尋思无（無）計可說、到不如后（後）花園命染黃沙。

主意定歎金蓮往外要走、小学生赶上前用手來拉。

奴有心喊嚷聲把他拿住、又非賊又非盜不犯王法。

氣扑（扑）假動怒揚手要打。看了着（看）小模樣拾（捨）不

的打他。

无（無）奈何咬銀牙掐他一把。十指尖伸玉腕用手掐。

罷（罷）罷（罷）一同你共入幃帳、好一是狂蜂蝶戲蕊折花。

小美女初会情難割難捨、又听得樵楼上五更古（鼓）兒發。

〔韻〕 発花轍

〔校〕 ○四更……各本とも「四更里」に作る。本テキストは脱落しているであろう。○主意難拿……上海咄本は「主念難拿」に作る。○要命冤家……曲詞館本は「要命的冤家」に作る。

○欲要從惟恐怕……曲詞館本は「從了你又□（只）怕」に作る。○奴的爹媽……上海咄本は「你老爹媽」に作る。○傳出去……

曲詞館本は「若傳出」に作る。○是起来……不明本は「題起来」、曲詞館本・上海咄本は「提起来」に作る。本テキストは「題」の「頁」

を彫り忘れたものと考えられる。○可設……曲詞館本・上海咄

本は「可奈」に作る。○欸金蓮……上海咄本は「契金蓮」に作る。○赶上前……曲詞館本・上海咄本は「走上前」に作る。○喊嚷声……曲詞館本は「喊一声」に作る。○看了着……各本とも「看一看」に作る。○拾……各本とも「捨」に作る。○掐他一把……各本とも「擰他一把」に作る。○用手掐……各本とも「用手来掐」に作る。本テキストは一字少ない。○一同你……曲詞館本は「奴全你」、上海咄本は「一同」に作る。○共入幃帳……曲詞館本は「入羅幃帳」、上海咄本は「共入紅幃帳」に作る。○好一是……曲詞館本・上海咄本は「好一似」に作る。○狂蜂蝶……曲詞館本は「犯蜂蝶」に作る。○折花……曲詞館本・上海咄本は「採花」に作る。○古兒発……不明本・曲詞館本は「鼓兒發」、上海咄本は「鼓發」に作る。

〔注〕

○冤家……本来はかたきの意味であるが、転じて自分の子供や恋人などを指している。

○命染黄沙……命が黄沙にまみれる。転じて死ぬことを指す。「命染黄泉」ともいう。明・洪梗『清平山堂話本』「張子房慕道記」「張良答曰、倘若大限到来、身歸泉世、命染黄沙、如何留得（張良は答えて申します。「もしも寿命がきたら、この身はあの世に帰ってしまい、どうして引き留められましょう）」、『金瓶梅詞話』第一回「一个好色的婦女、因与了破落戸相通、日日追歡、朝朝迷恋、後不免尸横刀下、命染黄泉（好色な女は、ろくでなしと通じ、日々歡楽を追い求め、毎日恋に迷ったために、のちに屍を刀のもとに横たえ、命を黄泉に染めることになりました）」。

○氣扑扑……怒って呼吸が荒くなるさま。「氣英布」雜劇第二折「牧羊關」「氣撲ヌ（撲）重添意掙（ブンブンしながらも呆然とする）」。

○模様……顔かたち、身なり格好。または、様子。「望江亭」雜劇第一折冒頭白姑姑のせりふ「此處有一女人、乃是譚記兒、生的模樣過人（ここに一人の女性がおりまして、譚記兒といいまして、

生まれつきの容貌は人並み外れております）」。

○咬銀牙……「咬牙」で「歯を食いしばる」「かみしめる」の意。「咬牙切齒」ともいう。『西遊記』第七十回「努櫻唇緊咬銀牙（小さな唇をとがらせ、白い歯をきゅつとかみしめる）。『水滸伝』（李卓吾本）第七十七回「童貫越添心上怒、咬碎口中牙、喝道、這賊怎敢戲吾（童貫はますます怒り心頭、歯を砕かんばかりに食いしばり大声で言うよう、「こやつらわしをからかうか）」。

○好一是……「好一似」に同じ。「あたかも」のようだ。

○狂蜂蝶……「狂蜂」「狂蜂浪蝶」「浪蝶狂蜂」とも。色欲に狂った男を指す。『古今小説』第二卷「不遇探花郎、抖被狂蜂殘破（探花郎に遇わずして、狂った蜂に無惨に散らされた）」。「隋煬帝艷史」第十四回「就像狂蜂浪蝶一般、日日在花叢中游戲、酒杯几何嘗離手、絲与竹不曾停声（煬帝は）まるで狂った蜂や蝶のように、毎日花むらの中で遊び戯れ、酒杯を手にしたまま、音楽は止むとさがありません」。

○割捨……「割舍」とも。捨て去る。別れる。離れる。早い用例としては、『遊仙窟』「有同必異、自昔攸然。樂盡哀生、古來常事。願娘子稍自割捨（云うは別れのはじまりとは、いにしえから決まっております。楽しみ尽きれば哀しみ生ずとは、古来よりのならいず。どうか奥さま、思い切ってください）」がある。

〔訳〕

四更のころ若い美女は心を決めかねる。なんて素敵な若者、憎いお人かしら。

今日あなたの言うとおりにしなければあなたは帰らず、言うとおりにすればおとつあんおっかさんに叱られる。

このことが伝わって他人に知られ、あとで言われたら恥ずかしくてたまらない。

あれこれ考えてもよき計略もなし。裏庭で死んでしまうのがまし。心を決めて忍び足で出て行こうとすると、この学生は慌てて進み

出て引き留める。

あたしはわざと大声をあげて彼をつかまえようとするけれど、彼は盗賊でもないし悪いこともしていない。

ぶんぶん怒ったふりしてこぶしを振り上げ殴ろうとするけれど、彼の様子をみたら殴れない。

どうしようもない、齒をかみしめちよつと彼をつねる。指と腕を伸ばしてつねってやりましょう。

やめたやめた一緒にとばりに入りましょう。さながら狂った蜂や蝶が花蕊と戯れ、花を手折るよう。

若い美女は初めて男女の情を交わして別れがたい思い。またもや聞こえる五更の太鼓。

五更里 幼美女 如醉如痴。尊一声 小学生 要你听知。

奴今日 已同你 成就恩爱、千叮嚀 万嘱咐 莫叫人知。

小奴家有几句 知心話語。時刻〃(刻) 可要你 牢記心里。

年轻人 休作那 非礼之事。穿衣服 必須要整〃(整 有(齊)

〃(齊)。

作事晴(情) 休作那 少頭无(無)尾、年轻人 作点事 更得規矩。

說句話 休撒謊 老成為本、到晚來 休在外 轉回家里。

你來時 奴見你 將頭低下、就似你 見了奴 假粧不識。

這件事 休叫那 外人知曉、小人門 知道了 到处提及。

到家中 稟父母 早作主意。急速〃(速) 遣小媒 把婚姻事提。

那時節 小奴家 明媒正娶。成就了 百年好 永不分離。

〔韻〕 一七轍

〔校〕 〇尊一声……曲詞館本は「尊了声」に作る。 〇要你听知

……曲詞館本は「要你听之」に作る。 〇知心話語……曲詞館本

は「知心的話語」に作る。 〇牢記心里……上海咄本は「牢記在心

心里」に作る。 〇有〃(有)……各本とも「齊齊」に作る。

〇休作那……曲詞館本は「休要」に作る。 〇作点事……曲詞館本

は「諸凡事」に作る。 〇更得規矩……不明本は「更得規矩」、

上海咄本は「總要規矩」に作る。 〇老成為本……曲詞館本は「寔

成為本」に作る。 〇你來時……曲詞館本は「從今後」に作る。

〇就似你……曲詞館本は「你若是」に作る。 〇提及……上海咄

本は「提提」に作る。 〇到家中……曲詞館本は「回家中」に作る。

〇急速〃(速) 遣小媒……曲詞館本は「急速遣媒婆」に作る。

〇那時節 小奴家……曲詞館本は「那時節 小奴佳」に作る。 〇正

娶……不明本は「正妻」に作る。 〇成就了……曲詞館本は「成

夫妻」に作る。

〔注〕

〇醉痴……心が酔ったようにぼんやりしているさま。「如醉癡」「如

醉如癡」などの用例が見られる。『張協狀元』第三十二出冒頭の

淨のせりふ「似病非病、如醉如癡(病氣のようで病気でなく、心

はうわの空)」。

〇千叮嚀万嘱咐……何度も念押しして言い含めること。『金瓶梅

詞話』第五十三回「便思想薛姑子臨別時、千叮嚀、万嘱咐、叫我

到壬子日吃了這藥、管情就有喜事(思い出せば薛尼が帰り際、何

度も念押ししているには、私に壬子の日にこの藥を飲めば、きつ

とおめでたがあるよと)」。

〇知心……肝胆相照らすような間柄。互いによく理解しあっている

ことをいう。

〇整整齊齊……きちんと整っていること。『西廂記』(弘治本) 卷

五第四折第二支【落梅風】前の淨(鄭恒)のせりふ「打扮得整〃(整)

齊〃(齊) 的、只等做女婿、今日好日頭、牽羊擔酒過門走一遭(き

ちんと身なりを整えた。花婿さんになるのを待っていたが、本日

はお日柄もよく、ひとつ羊を引いて酒を担いで婿入りしに行くとし

よう)」。

〇少頭無尾……「無頭無尾」「無頭無腦」などと同じ。でたらめ

である。めちゃくちゃである。粗暴で秩序のない。「後庭花」雑劇第三折【殿前歡】「這官司無頭無尾、那賊人難捉難拿（この裁判はでたらめで、あの犯人は捕まらぬ）」。

○小人門……「門」は「們」に同じ。

○作主意……「作主」做主などとも書く。責任を持つて請け負う。処理する。「救風塵」第四折【得勝令】後の安秀實のせりふ「我安秀實、聘下宋引章、被鄭州周舍強奪爲妻、乞大人做主咱（私安秀實は宋引章を娶っておりましたが、鄭州の周舍が強奪して妻にしてしまいました。お役人様どうか私のためにご処断ください）」。

○明媒正娶……仲人を立て、両親の同意を得て正式に結婚をすること。「明婚正娶」ともいう。『荊釵記』第二十九出「搶親」淨のせりふ「我當初嫁你。也是明媒正娶。又不是暗地里偷情、強來隨你（最初にあなたに嫁いたときも、正式に仲人を立てて結婚式を挙げました。こつそり逢い引きしたり、無理矢理押しかけたんじゃありませんよ）」。「救風塵」雜劇第四折【太平令】「那里是明婚正娶、公然的傷風敗俗（どこが正式に結婚したっていうのよ、堂々と風紀を乱す真似をして）」。

〔訳〕

五更のころ若い美女はうつとりと、恭しく申しあげるよう「学生さんお聞きくださいませ。

今宵あなたと愛のちぎり、決して人には言ってくださいますな。心のうちを話しておきます。いつも心に留めおいてください。

若い者は礼に背くことをしてはなりません。身なりはきちんと整えてください。

仕事はでたらめをしてはなりません。若い者は仕事をしきたりどおりになくはいけません。

話をするときは嘘は言わず誠実に、夜は外をうろつかずうちへ帰ってくださいね。

あなたが来たら私はうつむいていますから、あなたは私を見ても

知らぬふりをしてください。

このことはよその人に知られてはなりません。つまりぬ人たちが知ればあちこちで言いふらすでしょう。

家に戻ってご両親に早く取りはからうように申しあげてください。すぐに仲人を立てて縁談をすすめてください。

そのとき私は正式に嫁いだ妻となり、百年を契り永く離れること
は
ない
で
し
よ
う。」

（補記）

冒頭の解説に掲げた三種の異本に加えて、濱文庫にもう一種の異本が所蔵されている。

・『新刻二十五更』（光緒十五年（一八八九）「汴省」文聚堂刊、
浜文庫／集171/21。浜文庫／集171/22も同版）

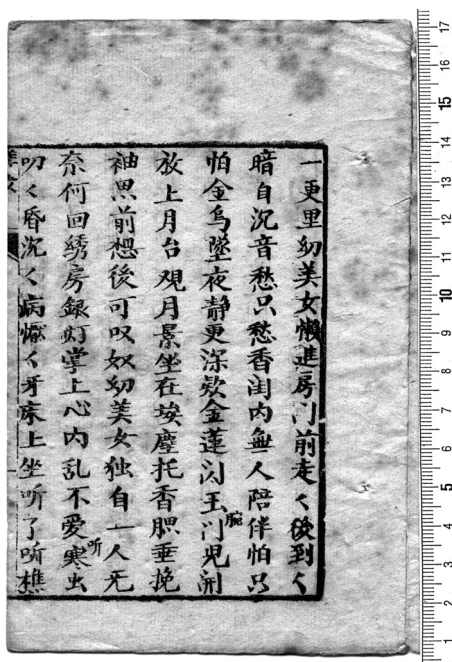


図2 第一葉 a 面

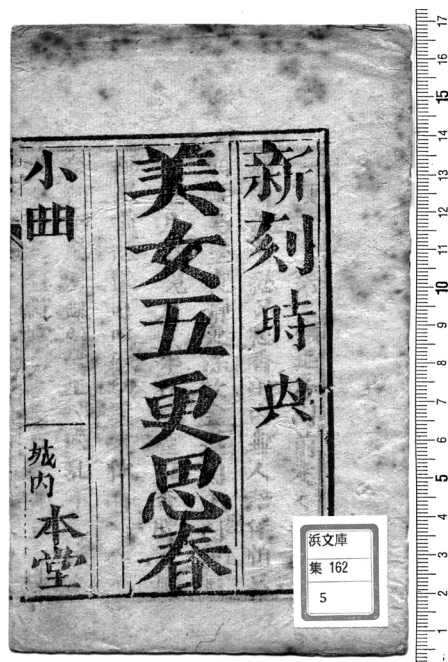


図1 『美女五更思春』(浜文庫/集162/5) 封面

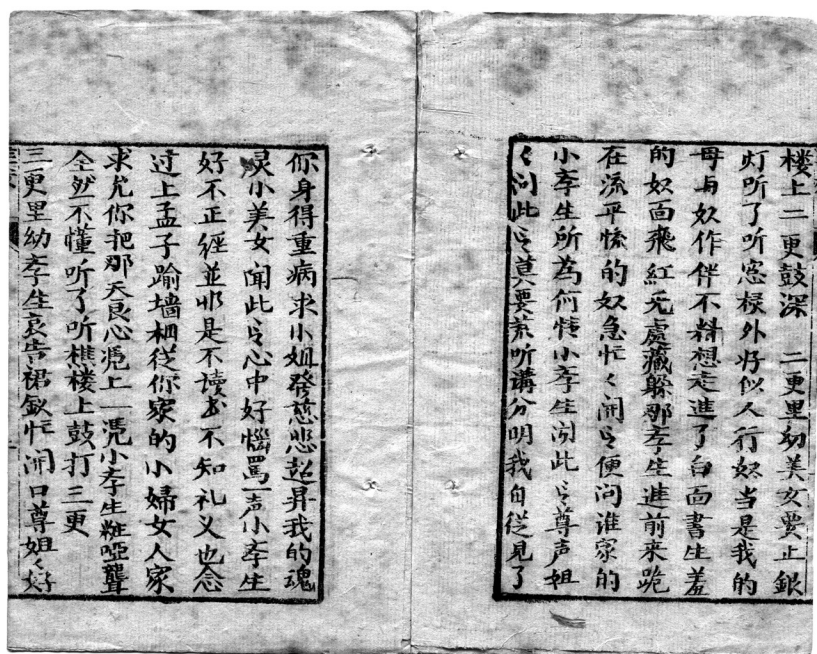


図3 第一葉 b 面～第二葉 a 面

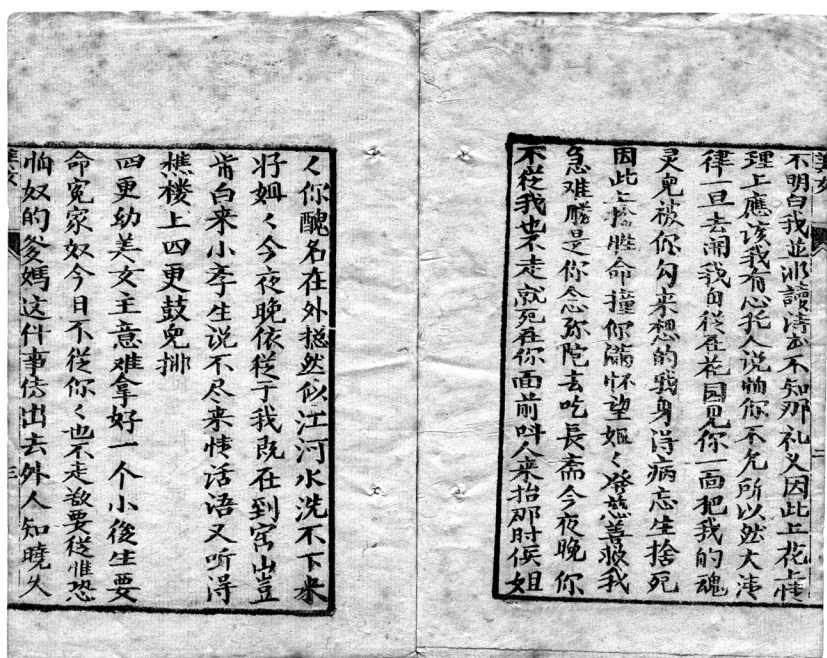


图4 第二葉 b 面~第三葉 a 面

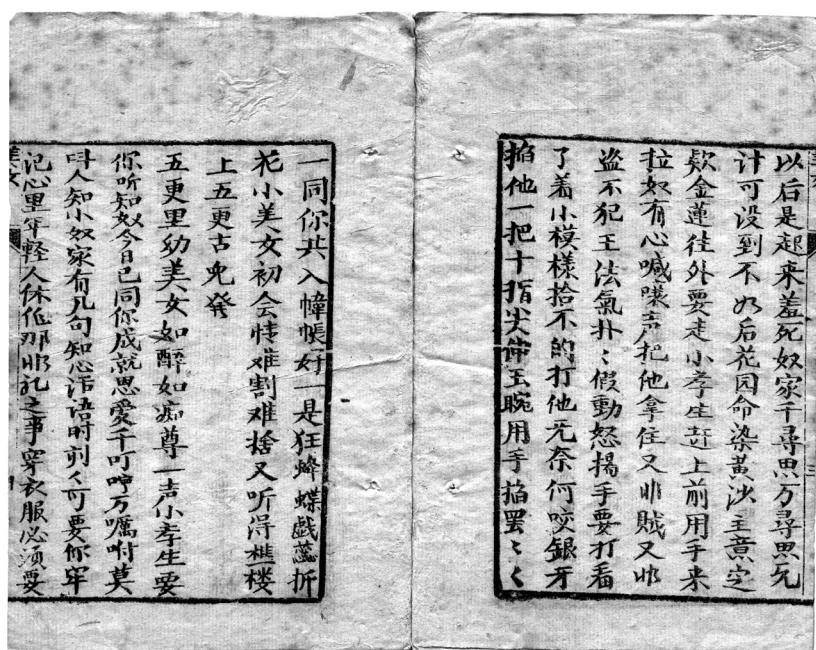


图5 第三葉 b 面~第四葉 a 面

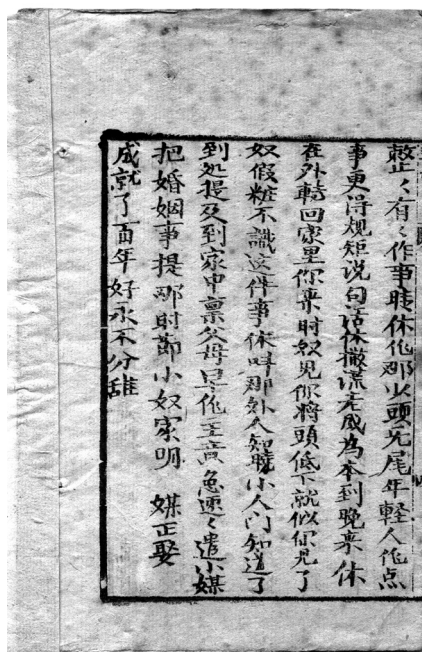
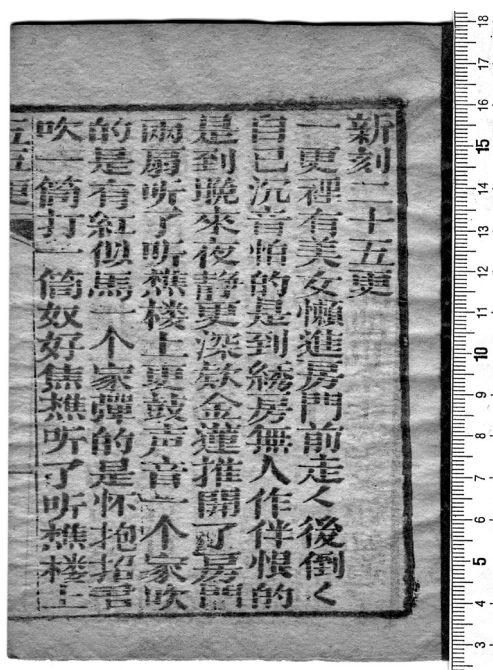


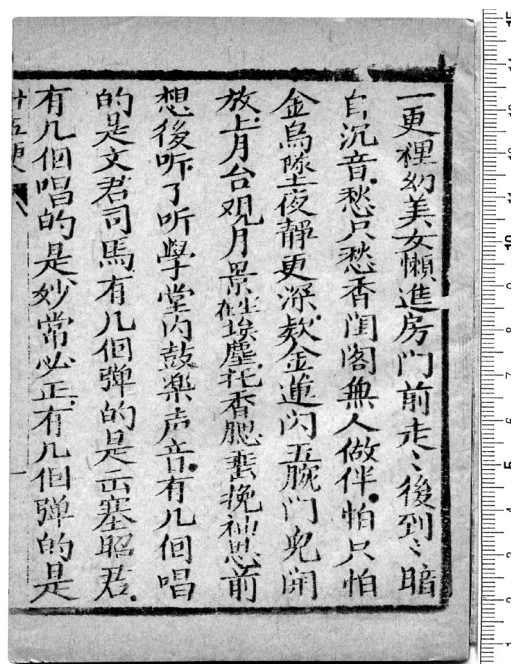
図6 第四葉b面



(参考) 図b 巻首



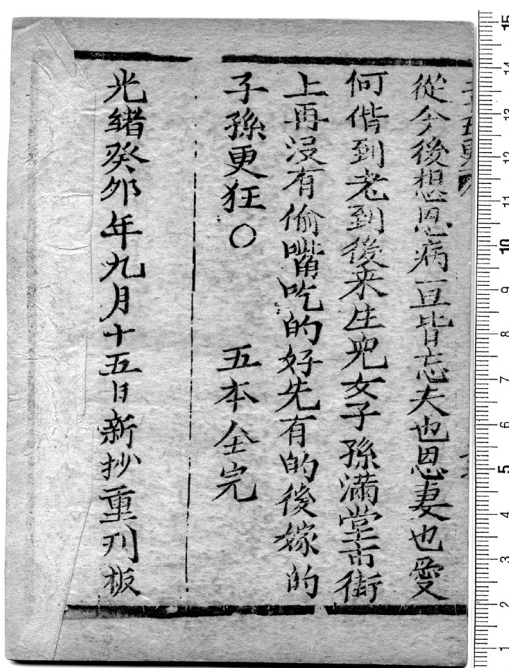
(参考) 図a 『新刻二十五更』(浜文庫／集171／21) 封面



(参考) 図 y 卷首



(参考) 図 x 『二十五更 五本』(浜文庫/集 164 / 62) 封面



(参考) 図 z 卷尾